

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	馬場谷 彰仁
論文担当者	主査 三輪 洋人
	副査 篠原 尚
	副査 波多野 悦朗
学位論文名	<p>Long-term clinical outcomes and follow-up status in Japanese patients with familial adenomatous polyposis after radical surgery: a descriptive, retrospective cohort study from a single institute</p> <p>(根治手術を受けた日本の家族性大腸腺腫症患者の長期予後と術後フォローアップ検査の調査報告(後ろ向き、単施設研究))</p>
論文審査の結果の要旨	
<p>家族性大腸腺腫症（以下FAP）はAPC遺伝子の生殖細胞系列変異を原因とする常染色体優性遺伝疾患である。FAP患者は無数の大腸腺腫を生じ将来的に大腸癌を発症するため、予防的に大腸全摘が行われる。しかし日本におけるFAPの長期予後に関するデータは、全国的な登録が確立されていないため明らかになっていない。そこで本研究では当院でデータをもとに全生存期間、新生物の発病率、便失禁などを評価した。1981年から2017年までに当院で手術を受けた154人のFAP患者に対して、アンケートを郵送した。返信があった65人（当院で経過観察されている36名を含む）を評価対象とした。その結果、フォローアップ期間の中央値は187か月（93.5～296）、手術時年齢の中央値は36歳（12～69）で、全体の生存率は5、10、15、20年でそれぞれ100%、98%、95%、89%であった。死亡した5名はいずれも大腸癌関連死ではなかった。FAPに関連する新生物としては、大腸癌23例、十二指腸癌5例、胃癌3例、甲状腺癌5例、ポーチ内癌2例、デスモイド腫瘍9例だった。根治手術からデスモイド腫瘍などの新生物発現までの期間に関しては、癌腫によって異なりがあった。54人の患者のうちの45人（死亡、もしくは永久人工肛門となった症例を除いた）に関して、ウェクスナースコアを用いて、便失禁の程度を調べた。直腸粘膜抜去と手縫い吻合をしている患者は便失禁が多く、またウェクスナースコアも低下していた。本研究は本邦で初めて比較的大規模なFAPの長期予後と術後の問題点を明らかにした臨床的に重要な研究であり、学位授与に値すると評価した。</p>	